# 安田講堂でのがん医療鼎談

がん社会を診る

中川 恵一

東大病院と大同生命は、今年の2月から、中小企業における「がんの意識と就労状況」に関する共同研究をスタートしています。

本研究は、「がんになっても安心して働ける中小企業の職場環境づくり」を目的としています。がんに関する様々なデータや事例の分析・検証に加え、セミナー等を通じて中小企業経営者に「がんのことを広く深く理解してもらう」ことも大きなミッションの1つです。

その取組みの一環として、今月5日、東大の安田講堂で、特別講演会を開催しました。安田講堂は、国指定の登録有形文化財で、1925年竣工のたいへん歴史ある建物です。1968年の東大紛争では学生と当局との激しい攻防戦の舞台にもなりました。

今回の講演会は「働く世代のがんの早期発見と治療」を主なテーマとし、まず、私と南谷優成医師が講師を務めました。

イラスト　中村　久美

そして、私が医学部時代に解剖学を学んだ恩師であり、累計450万部を超える大ベストセラー「バカの壁」でも有名な養老孟司先生（東京大学名誉教授）をお招きしました。

養老先生には、今回のテーマにそって、普段聞くことができないご自身の健康や医療に対するお考えなどをお話いただきました。

3人による鼎談では、養老先生の心筋梗塞や私の膀胱がんの経験を材料に、医療との距離感やつきあい方、がんの「過剰診断」などについて、和やかで深みのあるトークが展開されました。

なお、病院へ行くのも、医療を受けるのも大嫌いだった養老先生が、東大病院で医療を受けることになった経緯は、10万部のベストセラーとなった共著「養老先生、病院へ行く」（エクスナレッジ）にまとめています。

当日はあいにくの雨模様でしたが、約550名もの方が来場されました。コロナ感染防止対策として座席の間隔を空けた上で、ほぼ満員となりました。「中小企業の職域がん対策」への関心の高さがうかがえると思います。

また、受講後アンケートでは約98％の方が講演内容について「大変満足」「満足」と回答されました。

今、わが国は、年間約100万人が新たにがんと診断される「がん社会」。「がんになっても安心して働ける職場環境づくり」に向けて、中小企業経営者に、がんを知って頂くための非常に意義のある機会となりました。

（東京大学特任教授）

---

**訂正**

5月11日付「HPVワクチン、4割が前向き」の記事中で「平成13年（2001年）」とあるのは「平成25年（2013年）」の誤りでした。